工学部、創立七十五周年記念事業を実施

記念事業実行委員会委員長（工学部評議員）
廣安博之

広島大学工学部は、一九二〇年（大正九年）、広島高等工業学校として設立され、一九九五年の今年七十五周年を迎えた。この機会に、さらに新しい一歩を踏み出すことを期して、七十五周年記念式典ならびに記念行事を挙行した。

記念式典での茂里工学部長の挨拶にもあったように、工学部の最初の四半世紀は高等工業学校としての発足で地元工業を支える人材の育成に寄与し、次の四半世紀は戦後の新制大学工学部への組織替え、大学院修士課程の設置であり、高等教育機関としての基礎固めであった。そしてさらに次の四半世紀は、学部組織の改組、大学院博士課程の設置そして新キャンパスへの移転であった。

そこで、二十一世紀へ向けての新しい環境での工学教育と研究のさらなる成果を期待して、昨年来より委員会を組織し、記念事業の計画を練り、次の事業を五月二十日(土)を期して挙行した。

○記念モニュメント―時計台の設置

写真にもあるように、七十五周年にちなんで高さ七メートルと五メートルの二本の柱、七と五の文字、情熱と知性を表わす赤と青の色、その他もろもろの意味を込めて、東福利会館と事務棟の間に設置し、当日午後一時より、齢い七十五歳になられる元工学部長で元学長の頼實先生を含めて除幕式を挙行した。

○学部紹介と研究室公開・学生による出店・餅つき

卒業生や東広島市の市民の皆様のため、工学部の研究室、施設の紹介をポスターセッション形式でパネルに展示して紹介をするとともに、希望者にはラボツアーと称して、引率者が見学者を連れて研究室を案内した。

また、工学部南と東図書館の間では、工学部の学生による餅つき、樽酒、出店のふるまいを行い、市民、学生が七十五周年を祝った。

○記念講演と記念フォーラムの開催

記念講演は、上述の頼實正弘先生（現在比治山大学長）が、「認知科学のすすめ」と題して、情報の入出力装置である脳の階層構造、脳の機能など、先生の最近の研究成果が披露された。

記念フォーラムは、「地域産業界の発展と大学の使命」と題して、新しく四月より発足した広島大学地域共同研究センター長の長町三生教授の司会で、中国電力技術研究センター長の加藤義明氏、㈱ヒロテック社長　鵜野俊雄氏、広島県商工労働部次長畠山幸久氏および工学部長の茂里一紘先生の四人で、各人の基調講演に続いて、フロアからの討論を行った。地域産業界と大学との連携、中堅企業、中小企業の抱える問題点、中国地域の産業構造の推移と将来展望、大学・大学院教育の役割と変化、大学と社会との連携など、多くの問題を提起し、討論は尽きなかった。

○七十五周年記念式典・祝賀会

記念式典で挨拶する茂里工学部長

記念式典は、午後五時から四月に完成した大学会館大集会室で、茂里一紘工学部長、原田康夫広島大学長の挨拶、讃岐照男東広島市長の祝辞があり、特別功労者表彰として、工学部の教育研究にご尽力いただいたリョービ㈱社長　浦上　浩（浦上育英会理事長）、㈱佐竹製作所会長　佐竹利彦（佐竹技術振興財団理事長）、㈱シンコー社長　筒井数三（工学部後援会副会長）、マツダ㈱名誉会長　山崎芳樹（工学部後援会長）の四氏を表彰した。

さらに、工学部旧教職員の表彰ならびに永年勤続者表彰を行った。続いて、広島工業専門学校の昭和二十年卒業生に、被爆直後の混乱期で卒業証書が受け取られなかったために、五十年ぶりに原田学長から卒業証書が授与された。また、七十五周年記念論文コンテストの入賞者五名に記念品と賞状が渡された。

続く祝賀会は、大学会館食堂で三五〇人の来賓、卒業生、教職員で盛大に行われた。

○工学部創立七十五周年誌と記念出版の刊行

工学部は、一九七〇年に五十周年を挙行したので、その後の二十五年の工学部の軌跡と現状および将来への展望、ならびに七十五周年記念事業の概要を、論文コンテストも含めて記載し、七月末に刊行することにした。

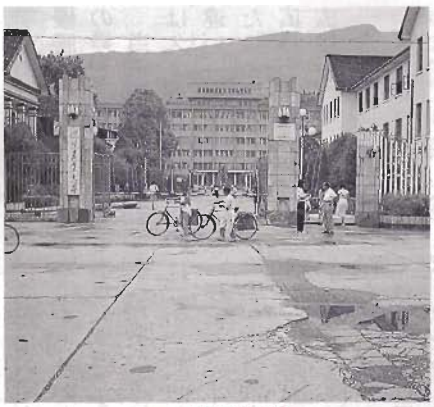
さらに、工学に関わる各種事象や現象の不思議さ、面白さを中高生ならびに一般の人たちに知ってもらうとともに、工学部の活動内容を紹介する意味で、一話二頁での「技術最前線八十二話—二十一世紀の技術社会を拓く—」と称する書籍を七月末に発行し配布することを企画し、作業に取りかかった。

○留学奨学生制度の発足

国際協調と国際貢献をさらに深め、工学部のイメージアップのため、創立七十五周年を契機として、毎年一名の大学院生を六か月から一年以内で海外に派遣するとともに、海外から同様に一名の留学生を受け入れる「留学奨学生制度」を発足させ、本年度から実施することを発表した。

生物生産学部、四川農業大学と学部間交流協定の締結

生物生産学部畜産科学講座 ❖ 山本禎紀


▲四川農業大学

はじめに

国際交流協定の多くは、特定の教官や研究室間の付き合いとその実績を基礎にして結ばれています。しかし、ここにご紹介する四川農業大学との場合は、だいぶ違った経緯でなされました。

広島のローカル番組では、しばしば四川省との交流のニュースが取り上げられ、中国の中でも四川が身近に感じられます。これは、広島県が四川省と、広島市が重慶市と、ここ東広島市は徳陽市と、四川農業大学のある雅安市が三次市というようにさまざまなレベルで縁組がなされているからです。

七塚原(ななつかはら)にある県の畜産試験場を訪ねると四川省からの研修生に、養豚家を訪ねると四川の農家からの実習生に出会うなど、交流の盛り上がりが感じられます。そこで当学部でも、四川省の大学と学術交流をはじめ、地域の人々や家族を含めた本格的な国際交流に発展させたいと思いついたのです。

しかし、残念ながら四川と特別のつながりを築いている教官はいませんでした。

交流協定への道程

交流の第一歩は、一九八八年名古屋で行われた万国家禽学会に、四川農業大学の邱祥聘という教授が招かれていることを知り、連絡を取ったり、面識のない先生を空港で迎えるなどから始めました。

当時、通訳のできる院生がいなかったので、工学部の院生、張小春氏に頼み、先生の講演と交流の会を成功させました。

その後、一九九一年に私が四川農業大学を訪ね、講演と交流懇談会を行い、お互いに援助しあい交流を重ね、協定を結ぶ努力をするとした教授間の「交流覚え書」を交換しました。一九九二年には国費留学生として周維統君を迎え、一九九三年には訪中した山谷洋二教授が専門家として交流を深めてきました。また、この交流に積極的に取り組んできた畜産系では、当学部の実情を理解してもらうために資金を工面し、張光柱助教授と毛凱講師を招いて、交流の可能性を検討してもらいました。

個人的な交流には必ずしも交流協定を必要としませんが、資金援助の申請や学生を交えた場合、正式な協定が必要になります。四川農業大学側は協定の締結に積極的でしたので簡単に結べるものと考えていましたが、当時、学部長は極めて慎重で、留学生が帰国してからと条件をつけられました。

学部長が代わり積極的になっていただけたので、早速本年三月に学術交流協定を締結していただきました。岡田育穂学部長と胡祖禹校長との協定書への調印は、実質を重んじお金をかけない郵送方式ですませていただきました。

四川農業大学と今後の交流について

四川農業大学は九十年に及ぶ歴史を持ち、キャンパスは四川の省都「成都」から西南へ一五〇キロほど離れたところにある雅安市の中心部にあります。学部学生は約二二〇〇名、大学院生は博士課程二十五名を含めて約一五〇名、教職員数は、教授と助教授約二〇〇名、